

和辻哲郎『人間の学としての倫理学』第一章 人間の学としての倫理学の意義

人間の学としての倫理学の構想を倫理学史によって確かめる

六 アリストテレス Politike (eには長音符号)

(1) 「人間の学としての倫理学」と「Ethics の同義語としての倫理学」は同じか?

アリストテレス→体系的な Ethics を書いた最初の人と言われるが、ニコマコス倫理学は Politike

=個人及び社会組織の両面から考究して完成する「人の哲学」=人間の学としての倫理学

=ポリスの人に関する学=社会の全体性における人の学

=「主要技術」の学(最高の実践目的を認識する学)

(2) アリストテレスが個人を抽象化して出発するのは考察上の問題である

→個人主義的傾向=前4世紀の特徴、前5世紀プラトンとの違い、前3世紀の世界人の先取り

動植物との相違としての倫理学 ロゴスの実践としての人の働き

「ポリスは個人に先立つ」「人は本性上ポリス的動物である」

=社会的存在としての「人間」が前提

人間を個人的・社会的という二重側面から了解する姿勢は、『人倫の形而上学』において法論と徳論を展開するカントに(も)継承される

七 カント Anthropologie

(1) 人間知としての人間学 カント哲学は「人とは何か」を究明しようとする 道徳学としてのアントロポリギーが要請される(「人の全体的規定の学」)→この意味では人間の学としての倫理学

(2) 二世界論における「本体人としての無差別性」を人間の全体性として把握することは不十分

=アトム的個人の複数制に基盤を置く=全体性を把握しない→この意味では人間学でない

① 「主観的道徳意識の学」に限定して倫理学を捉え、人間学的立場を捨てる

② 人間学としてカントを理解し、社会主義的に了解する(コーヘン)

③ ①としてのカントを不十分として人間の学によって克服する(ヘーゲル)

八 コーヘン 人間の概念の学

(1) 人の学は人の有(存在)の学でなく人の概念の学である=観念論(思惟が存在を産出する)

(2) 論理学:カントの二世界論を放棄し、人の概念から多数性・総体性・全体性を把握する

倫理学:(「意識の統一」でない)「自覚」としての意識の問題

(3) 学の基礎づけを重視し、実践哲学でありながら実践的でない(ナートブルの批判)

九 ヘーゲル 人倫の学

カント→人倫の不徹底→ヘーゲルにより達成

(1) 「人倫の体系」の読解

絶対的人倫の理念、差別を含む絶対的実在性(差別を含んだ無差別)を、統一として自らの内に取り戻す=人倫はこうした生の全体性、本来の現実性